

【主題】自分の住む町をよりよくしていくために自分のできることを見出し、行動できる児童の育成

【副題】ESDの視点に立った「町づくり」学習の実践を通して

【学校・団体名】宮城県柴田町立槻木小学校

【役職名・氏名】教諭 大越 穂高

1 はじめに

本実践は、令和3年度第6学年の総合的な学習の時間で行った実践である。現在、世界や日本社会を取り巻く課題は多岐に渡り、社会の変化も目まぐるしい。社会の変化に対応し、探究的な見方・考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する総合的な学習の時間は大変重要な役割を持っている。これからの社会を生き抜き、持続可能な社会を実現していこうとする姿勢や観点を児童に身に付けさせていくことが大切であると考えた。そこで、ESDの視点に立ち、現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことができる題材として「町の未来を考える」ことを取り上げた。

本題材の実践に当たって、留意したことは以下の3点である。

①持続可能な社会づくりを構成する「6つの視点」の中でも「責任性」を大切にし、根拠を持って課題を見出すこと、持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な「7つの能力・態度」の中でも「未来像を予測して計画を立てる力」が身に付くように教師が働きかけることを意識する。

②情報機器活用の場面を設定することで、児童が各教科で学習した情報収集の仕方や情報を選択する力、文章、図や表にまとめたり、表現したりする技能を活かせるようにする。

③柴田町教育委員会による学校支援ボランティア「しばたっ子応援団」を活用し、学習内容に合わせた講師の方々を派遣していただくことで、児童にとってより具体的な現状把握、課題設定が行えるようにする。

2 主題設定の理由

これまで児童は、前学年までの総合的な学習の時間の学習で自分たちの住む柴田町の良さや特徴について学び、愛着を深めてきた。しかし、町には良いところばかりではなく、課題も多いのが現状である。これからの社会の創り手となる児童が町の現状を知り、課題を見

出すことは大変重要な機会であると考えた。また、課題に直面した上で、「自分にできることはないか」と主体的に考え、調べ、実践していくという社会に参加する姿勢を育てていきたいと思い、本研究主題を設定した。

3 研究の目標

自分たちの住む町について調べ、良さと課題を見出し、課題解決に向けた実践活動を通して、持続可能な社会の創り手としての意識を育む。

4 実践

(1)【1学期】町の現状を知る

①町の良さ

まずは、児童に柴田町の良さを改めて挙げさせた。これまでの学習から、児童からは次々と町の良さが発表された。

T「なぜそれが町の良さなのか理由は言えますか？」

C「そう聞いたことがあるから。」「何となく。」

T「その理由がはっきりわかる情報を探してみましよう。」

C「役場のホームページに表やグラフを見つけただけ、見方が分からない。」

「町の人にインタビューしてみるのはどうかな。」

以上のやり取りから、町の良さを調べるに当たって統計データの見方を知りたい・町役場の方や町づくりをしている方に話を聞いてみたいという思いを持たせた。

②講話を聞く

「しばたっ子応援団」を活用し、「統計データの見方」「福祉」「まちづくり」「観光」「くらし」「産業について」講師の先生を招いて柴田町の現状について講話をいただいた。児童は講話のたびに真剣に話を聞き、メモを取っていた。



(図1 講話のようす)

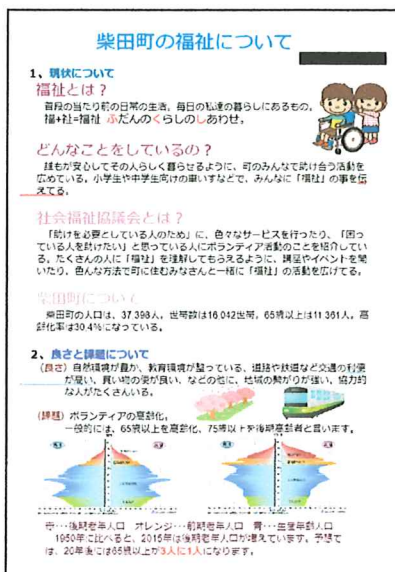
協力していただいたボランティアの団体は以下の通りである。

| | |
|--------|------------------|
| 統計 | 柴田町教育委員会生涯学習課 |
| 福祉 | 柴田町社会福祉協議会 |
| まちづくり | 特定非営利活動法人余白 |
| 観光 | 一般社団法人柴田町観光物産協会 |
| くらし | 柴田町役場都市建設課 |
| 産業（工業） | 特定非営利活動法人仙南広域工業会 |

講話後の感想発表では、「統計データの見方が分かったのでこれから調べていくときに活用したい。」「自分の住んでいる町のことも、知らないことがたくさんあって、知ることができて良かった。」「これから積極的に町のイベントに参加してみようと思った。」「自分のできることから始めてみようと思う。」「もっと柴田町を大切に、良いところを広めていきたい。」など、積極的な考えを聞くことができた。

③まとめる

ここまでの講話を聞いて今後さらに詳しく調べていきたい分野を決め、講話の内容、現状と良さ、課題について Google ドキュメントを使ってレポートとしてまとめさせた。課題を見出す際にはESDの6つの視点の「責任性」の視点に立つように声掛けし、データ等を提示してまとめさせた。



(図1 児童のレポート)

(2)【2学期】町の未来をえがく

①動機づけ

国語科「町の未来をえがこう」（東京書籍6）で、児童は教材文からバックキャスト法という考え方を学ぶ。（教材文の中では、「どんな町にしたいか」をえがいてから、そのために何をすべきかを考え、成功した例が挙げられている。）

T「1学期の総合で、みんなも柴田町の現状について調べたね。」

C「いろいろな課題があって解決するのが難しそう。」

T「〇〇町や△△市も、いろいろな課題はあったけど解決しているね。」

C「バックキャスト法を使ってどうするか考えていた。」

「柴田町の課題も解決できるんじゃないかな。」

教材文の読み取りの学習を終えた後、以上のやりとりから国語科の学習と総合的な学習の時間に取り組んでいる町づくりの学習を結び付けさせ、町の未来をえがく動機づけを行った。

また、児童は4月から週末課題として翌週の目指す姿を具体的に決め、そのためにどんなことをするか文章に書く活動を行ってきた。これらの経験についても触れ、ESDの7つの能力・態度の「未来像を予測して計画を立てる力」を意識して町づくりについて考えていくように声掛けした。

②バックキャスト法で町の未来をえがく

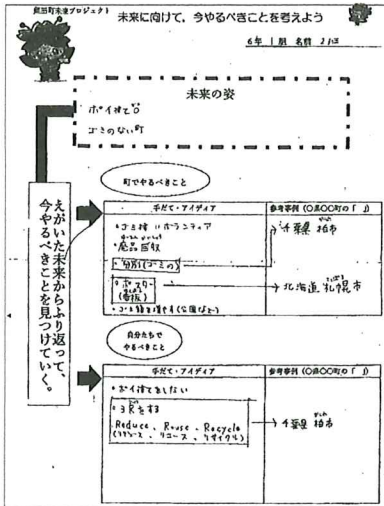
初めに、児童は個人で町の未来の姿をえがいた。この際に、1学期に学習した現状を振り返らせ、具体的に町の未来をえがくように声掛けを行った。

次に、えがいた町の未来の姿をもとに班編成を行った。ここでは、教師主導ではなく、児童に自由に話し合わせ、グループを編成させた。その後、グループでさらに町の未来の姿を話し合い、決定していった。

| 班 | えがく未来の姿 |
|----|--|
| 1 | ・差別のない町 (LGBTQ) |
| 2 | ・ポイ捨て0でゴミのない町 |
| 3 | ・空き家のない町 ・ポイ捨てのない町 |
| 4 | ・環境に配慮した町 |
| 5 | ・趣味が楽しめる、イベントがいっぱいある町 |
| 6 | ・空き家、ゴミがないきれいな町 |
| 7 | ・若い人からお年寄りまで楽しめる町 ・にぎやかな町 |
| 8 | ・おいしいものがたくさんあり、若者の人口が増える ・ゴミが少なく、自然を活用した観光地が増える |
| 9 | ・元気な高齢者が増えて、ボランティア活動を長く続けられるようにする ・これから担う若い人ができる範囲から興味や関心を持てるような取組をする |
| 10 | ・進んで地域の人と関わる ・お花を大事にする |
| 11 | ・住みやすい町になって若い人がたくさん住んでいる町 |
| 12 | ・花がきれい観光に訪れたいと思う町 ・子どもから大人、高齢者まで安心してイベントに参加できる町 |
| 13 | ・町がきれい、観光スポットでにぎわいを見せる町 |
| 14 | ・人口の多い町 ・たくさんの人が知っている有名な町 |
| 15 | ・整備された自然がいっぱいある町 |
| 16 | ・町民がすすんでボランティア活動に参加する町 ・ボランティアの高齢者が元気になる町 |
| 17 | ・子育てがしやすく、子どもがたくさんいる町 |
| 18 | ・働く場所が多くて若者が多い町 |

(図3 児童がえがいた町の未来の姿)

町の未来の姿をえがいたあと、その未来の姿になるためにやるべきことをグループごとにワークシートを用いて考えさせた。その際、町のこととして行政に投げかけるだけでなく、自分事として解決に向かえるように①町でやるべきこと、②自分たちでやるべきことの2つの視点で考えさせた。また、これまで国語科で学習してきた「事例を挙げて具体的に述べる」ということを生かすために、参考事例となる他の市町村での取組をもとにやるべきことを考えさせていった。参考事例を探る際には、タブレットPCを使用させた。児童は様々な市町村のホームページや非営利団体などのサイトを参考にして、やるべきことを考えていった。(図4 グループ活動ワークシート)



③まとめる

Google スライドを用いてプレゼンテーションにグループの考えをまとめさせた。ここではプレゼンテーションの仕方の学習ではないので、プレゼンテーションの構成は例示し、児童にとって大きな負担にならないようにした。

プレゼンテーション構成 (例)

- ①柴田町の良さと課題
- ②グループで考えた「町の未来の姿」
- ③提案 (町でやるべきこと・自分たちでやるべきこと)
- ④提案の根拠 (参考事例)・必要性 (町の課題から)
- ⑤まとめ

児童はGoogle スライドが共同編集できる利点を生かし、児童らは作業を分担してまとめ活動を行っていた。また、アニメーション等を付けすぎないように声掛けをしたり、動画の埋め込みや画像の挿入など操作で難しい部分はその都度教師が支援したりした。



(図5 児童がタブレットを使用している様子)

自分たちがやるべきこと

提案2

- ・ゴミをポイ捨てない
- ・ゴミが落ちていたら拾う

提案2の根拠

・宇都宮花火大会清掃ボランティア



(図6 児童が作成したプレゼンテーション)

また、まとめたものを誰に発表したいかと聞くと、「家族」「先生方」「町役場の方々」「町長」などが挙げた。なぜ役場の方々にも聞かせたいのかと聞くと、「町のために考えた提案だから」「町づくりに関わる人々に聞いてもらいたい」という考えが児童から自然と出てきた。

発表練習の際には、タブレットを操作する担当と原稿を伝える担当を分けたり、動きがスムーズになるように並び順などを工夫したりしている様子が見られた。

④発表する

児童の「町づくりに関わる人々に聞いてもらいたい」という思いを実現させ、それぞれの分野ごとに関わりのある講師の方々をお呼びし、教室を分けて発表を行った。各グループの発表ごとに講師の方から良かったところや感想をいただいた。また、発表会の最後に講師の方から児童の発表を受けて、実践活動の提案をいただいた。(事前に講師の方々と教員側で打ち合わせ済み。) 児童によっては自分たちの提案通りの実践ではないグループもあったが、提案に対して意欲的な反応を示していた。



(図7 発表会の様子)

(3)【3学期】実践活動

発表会で受けた提案をもとに、児童の思いも達成しながらそれぞれの分野ごとに実践活動を行った。また、この実践活動の際にも町の方々から支援をいただいた。

①福祉分野

お年寄りの方々に元気になってもらうために、老人ホームの方々に歌や手遊びなどを撮影した動画を贈る活動を行った。始めにグループごとに案を出し、タブレットPCを用いて調べながら内容を決定していった。その後準備や練習をし、撮影を行った。動画の編集は町の担当者が行って下さった。後日老人ホームの方々からお礼のお手紙やビデオメッセージをいただいたことで、児童は自分たちの活動が相手を喜ばせたという実



(図8 動画の様子)

感を持つことができ、大変喜んでいました。

②町づくり分野

町内に空き家がある問題を取り上げ、町の活性化のための空き家の活用として、今後柴田町で活用していく空き家を掃除した。また、



(図9 掃除の様子)

③観光分野

観光地や公園がもっときれいになればたくさん観光客が来てくれると考え、ゴミのポイ捨て防止のための働きかけとして、ゴミのポイ捨て防止を呼び掛ける宣言書をタブレット PC を用いて作成した。作成の前に、町内のゴミ拾いを行い、「これだけのゴミが落ちている」ということを印象的に伝える工夫などをした。作成した宣言書は町内の公園や観光地に掲示された。



(図10 作成した宣言書)

④くらし分野

住みやすい町、自然豊かな町づくりを目指し、植樹活動を行った。自然を増やしたいという思いを持っていた児童も多く、植樹場所が自分たちのよく目にする榎木駅前ということもあり、大変な作業もあったが最後まで植樹をやり遂げる姿が見られた。



(図11 植樹活動の様子)

【児童の振り返りから】

- ・私は空き家掃除をしました。掃除した家の活用法を考えたりしました。「自分がしたいから」ではなくて、みんなのためにどう使えるかを考えることができました。
- ・ゴミ拾いに行き、予想以上にポイ捨てがひどいことが分かりました。宣言書を書いて、今後ゴミを見つけたときにどう行動する人になりたいか具体的に考えました。
- ・自分たちの考えたことが実現し、自分たちで町の未来を変えていくことができるんだなと思いました。柴田

町を変えたいと思って行動すれば変えることができるのを知ったので、これからも町のことを考えていきたいです。

5 まとめ

本実践を通して、児童は自分の住む町の現状や課題について詳しく知ることができた。学習の中でとったアンケートでは、「学習前より柴田町が好きになったか。」に対して、実践(1)②の講話後は肯定的意見(とてもそう思う・そう思う)が81%だったのに対し、実践(3)の実践活動後は90%に上昇、また、「柴田町をもっとよくするためにあなたができることはあると思いますか。」に対しては実践(1)②の講話後は肯定的意見が93%だったのに対し、実践(3)の実践活動後は98%に上昇していた。このことから、本実践を通して児童は自分たちの住む町への理解を深め、自分たちが課題を解決していけることを実感していることがうかがえる。また、自分たちの住む町の課題解決のために様々な自治体の政策などを調べることで、目の前にある課題は自分たちの住む町だけではなく、全国的な問題になっていることにも気付くことができた。

課題としては、児童が考えた「町の未来の姿」に向けての提案すべてを実践できたわけではないという部分が挙げられる。考えた提案すべてを受け入れるのは難しいが、なぜそれが実践できないのか、妥協点はないかなどを考えることで児童にさらに主体的に町づくりに関わらせることができたかもしれない。また、情報機器の利活用は1年間で技能を身に付けさせたため児童にとっても大変な部分が多かった。学年や発達段階に応じた系統的な指導の必要性とともに、各教科の中で情報機器の利活用を積極的に取り入れ、基本的な技能を身に付けさせることが大切だと感じた。

本実践では、柴田町教育委員会生涯学習課をはじめ、多数の方々から協力をいただいただけでなく、この学習がより良いものになるよう提案してくださったり、打ち合わせの機会を作っていただいたりした。児童にとっても自分たちの考えたことを生かして町のために活動できたという経験は大変貴重なものだったと考える。地域の方々と連携し、これからの社会の創り手である児童を育てていきたいという共通の思いを持って学習に取り組めたことに大変感謝している。

児童がこれからの社会の創り手として「自分たちができることを自分たちで見つけ、実践していく」という思いを持ち続け、更に成長していくことを期待したい。